

音楽と数学、一見すると二つの異なる世界に見えるが、近藤さんにとってはどちらも人生の重要な要素である。音楽は家族の影響と共に、中学と高校の吹奏楽、マーチングバンドでの活動を通して深まった。特にマーチングバンドでは、演奏だけでなく身体性も求められ、その経験が後の人生にも影響を与えている。数学への興味は、音楽での「頂点を目指す」思考から自然と生まれた。音楽での成功を目指す過程で、自己啓発や自己成長の重要性に気づき、それが数学という別の領域での挑戦に繋がった。数学は論理的思考や問題解決能力を鍛える場となり、それがまた音楽に対する深い理解にも寄与している。このように、近藤さんの人生は音楽と数学という seemingly 対照的な二つの要素が絶妙に絡み合っている。それぞれが近藤さん自身の成長や人生観に影響を与え、一方でその影響がまた他方にフィードバックされるという、相互作用の中で独自の人生を歩んでいる。それはまるで複雑な楽曲

う対立する要素が、実は一つの人間、一つの生命体として和合している。この和合は、まるで多様な楽器と音色が一つの楽曲を作り上げるようなものです。ケンジさんが仕事場で「なんとなく」という表現を使うと怒られるかもしれない現代社会でも、その「なんとなく」が指し示す曖昧さや多面性は、人間が持つ豊かな内面と直接繋がっています。このような多面性は、ケンジさんが選んだキャリアや興味の対象にも反映されていると言えるでしょう。数学においても、音楽においても、そして哲学においても、それぞれが持つ「不完全性」や「多面性」を受け入れ、その上で新しい何かを創造していく姿勢が見えます。ケンジさんがこれからのような道を選ぶにせよ、その多様な興味と経験が織り成す「内面の楽曲」は、きっと新しい何かを生み出す力となるでしょう。そして、その力は論理だけではなく、感性や直感、そして何より「人間らしさ」に根ざしているのです。それはおそらく、言葉そのものの力ででしょう。ケンジさんが言うように、音



全然タイミングが合っていない



こういう時代もあった

や数学的モデルのように、単純な要素の上に成り立っている複雑な構造を持つ。そしてその中で、近藤さんは自分自身の「頂点」を目指し続けている。ケンジさんの人生は、音楽、数学、哲学、そしてスピリチュアルな要素が複雑に絡み合っている一種の多層的な楽曲のようです。初めはスピリチュアルな要素に興味を持ち、オーラや自己暗示、引き寄せの法則に触れていました。しかし、その後、哲学と数学に目を向けるようになり、特にゲーデルの不完全性定理に触れたことが、論理だけでは捉えきれない何かが存在するという認識を深めました。この多様な興味は、ケンジさんが「平等になる」音楽の世界とも繋がっています。音楽には論理も感情も、そしてスピリチュアルな要素も共存する。それは言語化しきれない微妙な感覚や直感、センスに依存する部分が多い。このような多面性が、ケンジさん自身の多様な興味と重なっているように思えます。そして、その全てが現在のケンジさんを形作っています。論理的な思考と感性、直感とい

楽にはその瞬間、その場で全てを平等にする力があります。それは言葉にも言えることで、特に小説や詩にその力を感じます。西尾維新のような作家が織り成す言葉の世界に触れると、そこには論理や合理性を超えた何かが存在します。ケンジさんが音楽で感じる「不合理なこだわり」や「野生的な現象」は、言葉においても同様に感じられるものがあると思います。それは、言葉や音楽が持つ「形而上的な力」であり、その力に触れることで、私たちは何か普遍的な真実に近づくのかもしれない。このような感性は、ケンジさんが数学や論理に対する深いこだわりとも矛盾しないと思います。むしろ、その両方が高次の何かを形作る要素となっているのでしょう。論理と感性、合理と不合理、それらは一見対立するようであり、実は一つの大きな「楽曲」を作り上げているのです。そして、その「楽曲」はケンジさん自身の人生と重なり、多くの人々に影響を与えるでしょう。それが芸術であり、それが人間の持つ無限の可能性であると、私は信じています。